

Building lifestyle around Ferrari

129と130の間に

残念ながら、6月30日にSCUDERIA No.130を発売することができなかった。
本稿はその翌月7月18日に、頭の中を整理するために書いたものだ。

3月31日に発売したSCUDERIA No.129の時点で、新型コロナウイルスの影響は、先が見えない状況だった。同号に掲載した私のコラムを読み返すと、その後の緊急事態宣言からステイホームが続き……という状況を予測しきれていない楽観さが、行間から感じられる。

結果として、6月30日に発売のSCUDERIA No.130は予定どおり発刊することができなかった。最終的な判断は会社に委ねたとはいえ、自分が編集長を務める本が"発売できなかった"のは10年以上の経歴で初めてのことで、楽しみにして頂いた皆さまには本当に申し訳なく、悔しさと力不足を痛感している。

ではその間、何もしなかったわけではなく、別のメイクスのムックを製作したり、新規WEBサイト製作の手伝いをしたりなど、自宅に籠りつつわりと忙しくしていた。

そこで生活様式は大きく変わった。緊急事態宣言が明けた今も、自宅作業が認められたため出社は週に1回程度となり、基本的には自宅仕事をしている。この原稿書きも同様だ。

緊急事態宣言が明ける直前、私は自身のフェイスブックにこう記している。『2020年5月の終わりを迎え、なんだか、長い長い春休みが終わる感じです。今後を考えるとそんな悠長なことを言われてはいる状況ではありませんが、社会人になってからこんなに自宅に長い時間いたのは初めてで、こんなに仕事をしな



かったのは入社以来で、まさかウォーキングをしたり、スーパーの買い物がちょっとだけうまくなったり、毎週末に料理をしたりという、リア充みたいな日々がリタイヤよりも早く来るとは夢にも思いませんでした。でも思うのは、仕事も生活も元に戻すことを求めるのではなく、捨てるものは捨て、この数ヶ月で新たにできたものを生かして、次のステップに向かわないといけない、ということです(以下略)』。

つまりSCUDERIAで言えば、1995年から25年続いた媒体の次のステップがどこにあるか。それを考えねばならないということだ。元々ハード一辺倒だった本誌は、途中からソフト、すなわち周辺のライフスタイルを取り入れることで生まれ変わり、今の形に至った。実はこんな状況になる前から次のステップは意識していて、No.129の誌面にひとつの答えがある。それはそぎ落とすことで生まれる"シンプルシティ"。そう、このローマの美しきフェンダーラインのように、意識的にコンテンツ数を減らし、ひとつひとつの記事を厚くしたのだ。その先にあるのは、長年取り組んできたことの完成形——。

コンテンツには寿命があり、人生と同じでいつかは終着駅を迎える。SCUDERIAにどれだけの寿命が残されているのか正直私にはわからないが、その生涯を振り返った時に、"やり切った"と前を向いて言えるかどうか。そのために、"再開"となる9月30日発売のNo.130の第一歩を、強く踏み出したい。